

序 ボガトウイリヨフの生涯——モスクワ言語学サークルからプラハ言語学サークルへ

1 「フォルマリスト」ボガトウイリヨフ

演劇か学問か

ボガトウイリヨフ（名はピョートル、父称はグリゴリエヴィチ）は、一八九三年一月二十八日（露暦十六日）にロシアのヴォルガ河畔の都市サラトフに生まれた。父は金・銀細工師であり、母は小学校教員資格を有していた。

のちに演劇記号論の分野においても先駆的な役割を果たすことになるボガトウイリヨフは、サラトフ第二ギムナジウムに通っていた頃の学校記念行事において、プーシキンの詩「軽騎兵」（一八三三年）をみごとに演劇的に（登場人物それぞれになりきって）朗読し、その場にいあわせたみんなの驚嘆を誘い、学校から表彰されている。

「軽騎兵」は、四脚弱強格の四行からなる詩連が二十九つづくバラードであり、ひとりの軽騎兵が（現ウクライナの）キーウで体験した不思議な出来事を物語るかたちをとっている。軽騎兵は、ひよ

んな経緯からひとり寡婦と暮らしはじめるが、あるときその女がほうきにまたがり飛んでいくことに気がつく。自分もあとを追って飛んでいくのだが、女は「きかん坊、家へお帰り！ だれがあんたを呼んだ？ 食われちまうよ！」とやって、帰りの馬を用意してくれる。そこで馬にまたがり空高く舞いあがるのだが、やがて気がつくくと元の暖炉のそばに自分がいて、馬だつたはずのものは椅子であつた、という話である。

一九二三年にボガトウイリヨフは、この詩と民衆演劇の相互関係を論じた論考「プーシキンの詩「軽騎兵」——その源泉と、民衆文学にたいする影響」を発表している。ここでは、プーシキンの作品が民衆文化から受けた影響が指摘されると同時に、逆にプーシキンが本、歌、民衆版画などをおして民衆演劇のなかにはいつていつた過程があとづけられていた。そうすることによって、プーシキンの作品がもつ民衆性を立証する一方、民衆が自分たちの演劇などの芸術的手法のなかにプーシキンをいかにとりいれ、つくりかえていったかもあきらかにしている。

こうした〈高次の芸術〉と〈低次の芸術〉の相互作用は、ボガトウイリヨフの生涯のテーマのひとつとなっていく。

ともあれ、ボガトウイリヨフのこうした演劇的朗読の才能はギムナジウムでその後も発揮され、当人も俳優になることを夢みていたようだが、結局、一九一二年にモスクワ大学の文科（スラヴ・ロシア学）に入学している。もっとも、演劇熱は生涯冷めることはなかった。

民衆文化

大学生時代のボガトウイリヨフは、フォークロアや十七世紀以前のロシアの文学・演劇の研究にたずさわる一方、すでに野外調査でもかなりの成果をあげている。

一九一五年に故郷サラトフ県クズネツク郡で儀礼と英雄叙事詩を記録したのを皮切りに、同年にモスクワ県セルプホフ郡に赴き、約五十の民話と二十の歌のほか、呪文、謎々などを蒐集している。方言調査にも力を注いでいた。その後、ボガトウイリヨフは野外調査を重ねており、蒐集した資料は今日に至るも高く評価されている。

当時は、資料蒐集は素人にゆだねるのがふつうであり、ボガトウイリヨフのように研究者本人が野外調査にでかけるケースはまれであった。こうした傾向は当時のヨーロッパ全般に見られたようで、一九二〇、三〇年代にボガトウイリヨフは、研究者自身が野外調査をおこなわない姿勢を一度ならず批判している。調査者本人が「具体的な状況」のなかで民衆の「生の声」を聞くことを重視していた。ちなみに、一九一四年八月には、履修手続きの列にならんでいた新入生のヤコブソンとはじめて出会い、「奇妙におもわれるかもしれないが、いきなり」（ヤコブソン）将来の研究について語り合い、フオークロアと方言にかんする共同野外調査に誘っている。この提案は、一九一五年にモスクワ県ヴェレヤ郡において実現を見ている。

ボガトウイリヨフは、ヤコブソン以外にも野外調査を試みており、一九一六年にシエルギンとともに、ロシア北西部に位置するアルハンゲリスク県シエンクルスク郡をめぐるあるき、約百点の民話をはじめ、数多くの民謡を蒐集し、結婚儀礼、宗教詩、呪文その他を調査している。また、ボガトウイリヨフ単独でもこの土地を調査しており、十九世紀初頭に存在していたとされている英雄叙事詩がもはや存在していないことを確かめている。

ちなみに、シエンクルスク郡でおこなわれた野外調査では、生来の好奇心がわざわいしたのか、住民の疑惑をまねき、ドイツのスパイとして逮捕されている。野外調査にはこのたぐいの危険性がつねにもなっていた。

ボガトウイリヨフのアプローチは独特なものであった。当時のロシアでは、さまざまな地方にかんするフォークロアのテキストがあいついで出版されていたが、その多くは英雄叙事詩あるいは民話といったひとつのジャンルのみをあつかっていた。これにたいしてボガトウイリヨフの調査は、その地に存するすべてのフォークロア・ジャンルを対象とするとともに、民話、民謡、チャストウシカ（俗謡）、諺、格言、謎々、呪文、信仰、儀礼、慣習その他のアクチュアリティにも注意が払われている。つまり、現存するフォークロア形態の目録をただ記述するだけではなく、集団の生活がフォークロアにいかにか反映されているかという点にも注目していた。

このようにフォークロアを総体としてとりあげること、そして人びとの生活のなかでの（機能）に着目すること——これらはいずれも、当時としてはかなりまれなアプローチであった。

モスクワ言語学サークル

モスクワ大学の学生だった頃からボガトウイリヨフは、大学内の民衆文学委員会や、科学アカデミー付属モスクワ方言委員会の活動にも参加していた。

ボガトウイリヨフとヤコブソンは、一九一五年に両委員会で、ヴェレヤ郡での野外調査について報告をおこなっている。ボガトウイリヨフ自身は、翌年十月二十二日の民衆文学委員会で、「農民の再話および民話における夢」という報告もおこなった。当人はこの時期の活動についてつぎのように回想している（以下、外国語文献のブロック引用の翻訳は原則として桑野による）。

私がそこ〔モスクワ方言委員会〕に加わったのは一九一四年であり、その後ヤコブソンがやってきた。われわれは民衆文学委員会も訪れ、教授陣に歓迎された。しかし、われわれはもつと自

由に議論をたたかわせることができる自分たちの学生サークルをつくることに決めた。こうしてモスクワ言語学サークルが誕生し、革命後は公的な協会のようなものとなった。教授たちも顔をだすようになり、トマシェフスキー、シクロフスキー、トウイニヤノフのようなレニングラード（現ペテルブルグ）の文学理論家たちも数多く参加した。当時、レニングラードではオポヤズ（詩的言語研究会）が活動しており、われわれも協同していた。モスクワ言語学サークルでは、われわれの関心を引く問題の多くを、集団で検討に付していた。テーマはじつにさまざまであった。たとえば、ゴーゴリの中篇小説『鼻』の分析。ひっきりなしに新しいメンパーをつぎつぎとサークルに連れてきたヤコブソンを、正當に評価しておかねばならない。マヤコフスキーもよくやっつけており、長篇詩「一億五千万」をはじめ朗読したものこのサークルにおいてであった。詩人、学者、作家などが訪れた。〔……〕文学理論家たちの作業に作家や詩人が加わったのは、ヤコブソンの功績であった。このようなアプローチはやがて〈プラハ言語学サークル〉の基礎にもなった。

（レシヤク、シヴェドリク「最後の会話」「ボガトウイリヨフ、ピョートル・グリゴリエヴィチ——回想、資料、論考」）

ペテルブルグのオポヤズとともにロシア・フォルマリズム運動を担っていたモスクワ言語学サークルの活動は、ヤコブソンやボガトウイリヨフがロシアを去ったあともつづき、一九二四年に解散している。